

【図表2】年内入試の進路指導スケジュール

学年	高1	高2	高3
	文理選択	志望校群や入試方式決定	受験校決定→年内入試出願
指導や活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の資質能力や興味関心に合った進路を考え始める</li> <li>・探究学習等の中で、自分の活動を記録し始め、振り返る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志望理由書を書き始める</li> <li>・志望校を決める</li> <li>・志望大学群を考える</li> <li>・志望学問系統を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受験者を対象とした高大接続プログラムへの参加など</li> <li>・面接や小論文の練習</li> <li>・受験校を固め、志望理由を磨く</li> </ul>

\*今回本誌で取材した、探究学習や年内入試の指導に熱心な高校(P.14~)の例を基に作成

【図表3】接続重視の入試と広報のポイント

	接続重視の入試ポイント	広報ポイント
進路指導	▶その生徒に合った入試を見極めて勧める →低学年のうちからじっくりと自分に合った進学先を検討、見極める	▶低学年からのアプローチ ▶高校教員に比重を置き、教育を軸としたコミュニケーション
入試で何を問うか	▶探究学習や課題研究などから見える学力の3要素、資質・能力を見る。調査書、活動報告書	▶大学の教育の中身重視の情報発信 ▶高校との教育連携
入試の情報	▶獲得したい学生像と評価基準が明瞭。なぜ合格／不合格なのかわかる	▶明確なAPと連動した入試制度、評価ポイントの情報開示やフィードバック

成、面接指導に入っていきます。注意したいのは、本年度から総合型選抜の合格発表が11月以降となった点です。後ろ倒しになったことで「総合型で不合格なら、一般に切り替える」という受験戦略はリスクが高くなりました。高校は合格可能性を高めるために、より早い段階から生徒に志望校とその受験方式を見極めさせ、対策も早期化させると考えられます。

**丁寧な情報提供が 自学のファンをつくる**

このように年内入試の状況が変わる中で、今後、大学には「お互いの安心につながるコミュニケーション」が求められるでしょう。高校教員は基本的に生徒の希望を尊重します。独自性の高い、新しい総合型選抜を生徒が望んだ場合、二人三脚で指導する教員には大きなプレッシャーがかかるはず。前向きに取り組んでもらうためには、その入試で期待する学生像や評価の観点を、きちんと情報提供する必要がある。

指定校推薦も同様です。早期に進学先が決まるこの入試方式は、高校・大学双方にメリットがありますが、評価基準がブラックボックス化しがちで、ミスマッチが起

こることもありました。信頼関係のうえに成り立つ入試だからこそ、「推薦してほしい生徒像」を具体的に示すべきです。

今、入試は「選抜」から「接続」重視への転換が求められています。可否を振り分けるだけでは接続にはなり得ません。例えば、結果に関して「生徒のこの部分を評価した」「この点は合格レベルに達していなかった」というフィードバックをすることで、高校教員に「自学が求める資質・能力」を具体的に伝えることができます。それは高校の教育改善に生かされ、結果的に次年度以降、より自学に合った生徒が推薦されることにつながります。このように安心して生徒を送り出し、受け入れるための関係性づくりは、自学のファンづくりには欠かせません。

本年度はコロナ禍により、年内入試でよく評価される部活の成果を測る大会や検定試験の多くが中止になりました。見方を変えようと、部活や大会頼みではなく、探究活動など、高校生の日頃の学びの成果にフォーカスした入試こそ、より本質的な高大接続なのかもしれません。次ページからは、年内入試の指導に熱心な高校教員の声をご紹介します。ぜひ参考にさせていただきます。

REPORT

# 高校から見た年内入試

年内入試の目利きに聞く！

## 年内入試は高校教員と生徒の二人三脚

安心して生徒を任せ、受け入れる  
「安心コミュニケーション」を

年内入試積極活用の流れが拡大

かつて年内入試は、進学校からは「一般入試からの逃げ」と見られており、進路多様校でも「学力に不安がある生徒に一般入試を回避させる手段」とされるような消極的な活用がめだっていました。しかし最近、年内入試をポジティブに捉える高校が増えています。背景にあるのは、入試改革の進展です。多面的・総合的評価の推進によって、国公立大学では年内

入試の定員枠が広がりました。加えて、探究学習に熱心に取り組む高校が増えています。高校側からは、「意欲の高い生徒が、探究学習等の成果を使って、志望大に進学できるのではないか」という期待が高まっています。特に専門高校からの期待は顕著です。専門高校にはレベルの高い課題研究に取り組んでいる生徒がいるため、大学にとって専門性の高い学生を獲得できるチャンスだと言えます。さらに本年度は、コロナ禍の影響で、授業に遅れが出ています。

安全志向により年内入試を選ぶ受験生の増加が見込まれます。

**高2の時点で志望校決定 指導は早期化へ**

高校側から見た年内入試の特徴をあらためて整理してみよう【図表1】。年内入試と一般入試の違いは教員の関与度です。年内入試は一般入試と比べて、推薦書の作成、志望理由書の添削、模擬面接など、さまざまな教員のサポートが必要なため、生徒と教員が二人三脚で臨む入試です。そのため、教員が指導に迷うような入試、情報が乏しい入試は、どれだけ特色を出しても、生徒に勧めてもらえない可能性があります。

年内入試の進路指導スケジュールも確認しておきましょう【図表2】。高2の冬休み明けに一般入

【図表1】高校から見た一般入試と年内入試の違い

	一般入試	年内入試
評価	・偏差値に応じた教科学力	・教科学力「+α」。大学によりさまざま
対策	・生徒1人でも参考書、問題集を使って可能	・高校教員と二人三脚で行う ・高校の推薦が必要な場合も
指導	・模試の結果を参考にしながら明確な指導が可能	・情報が乏しい入試は受験を勧めない ・大学のポリシーや教育内容を重視した個別指導 ・低学年から始める高校も

試と年内入試のどちらで受験するのかを検討させ、このタイミングで志望理由書を書かせる高校も多いようです。高3になると志望校を念頭に置いた志望理由書の作



(株)進研アドマーケティング戦略部チーフアドバイザー 佐々木悠俊

ささきゆうしゅん ●2012年(株)進研アド入社。首都圏エリア、関西エリアの大学支援を担当。2016年(株)ベネッセコーポレーション高校事業部にて、学習・探究・進路研究などの支援を行う。2019年より現職。